

東日本大震災を宮古で経験

水産加工業の復旧・再生を目指して



植田 真弘 名誉教授

岩手県立大学宮古短期大学部学部長、地域政策研究センター長などを歴任。専門は経営学。女性問題にも取り組み、平成31年よりりおか女性センター長を務める。

学生の安否確認に奔走した  
震災直後

地震が発生した時は宮古市内の高校で打ち合わせをしていました。しばらく様子を見ていたのですが、津波警報が発表されたので直ぐに大学に戻りました。後期試験が終わる春休みに入っていました。学生寮に残っていた学生を学内の安全な場所に避難させました。当夜は、避難所に指定されていた大学に隣接する中学校へ学生を避難誘導しました。

宮古短期大学部は少し高い場所にあったため、しばらくの間、宮古市内が津波によって大きな被害を受けていることを知らずにいました。教員の一人が車載テレビでニュースを見て、その惨状を初めて知りました。

翌日からは学生の安否確認に追われました。街中は瓦礫に覆われ車など使えないので、市内のアパートや下宿に暮らす学生のもとへ自転車や徒歩で向かい状況を確認して回りました。春休み中だったため帰省している学生も多く、全員の安否を確認するのに時間を要しました。

多くの学生が津波によって家族や親戚の方を亡くされるなど甚大な被害を受けましたが、2名の本学部生も犠牲になられました。

震災からしばらく経ち入学手続の時期になったのですが、内陸から入学してくる方たちが宮古まで来れず、急遽滝沢キャンパスでも手続できるように調整しました。そしてわれわれが最も苦労したのが、アパートや下宿の確保でした。多くのアパートが流失してしまったことに加え、いつもなら春の人事異動で空

くはずの部屋が空かなくて。紆余曲折の末、朝8時に盛岡駅を発つ宮短専用の送迎バスを運行して対応することとしました。バスで来る学生は1限目に間に合わないので、時間割も大きく組み替える必要がありました。約半年はバスを走らせたのではなかったでしょうか。

学生へのケアは、震災前に始めていた「オフィスアワー」が役立ちました。これは水曜日の3限に各先生の研究室を開放し、学生が教員に個別に相談できる時間を設けたものだったのですが、震災後もこの時間を使い、心理的な不安や学業についての悩み、経済的な悩みなどさまざまな相談ができていたようです。

岩手県立大学では学生ボランティアセンターなどを中心に学生のボランティア活動も盛んでしたが、宮古短期大学部でも学内サークルのJRC（学生赤十字奉仕団）を中心に活動が行われました。しかし宮短の学生は、自らが被災者でもあ

りました。津波で破壊された街を見たショックが大き、もう瓦礫は見たくないという学生もいました。数年を経てもそのトラウマは大きく、震災学習等で語り部のお話を聞いたり津波の映像を見たりする機会もあつたのですが、沿岸出身の学生のなかには、フラッシュバックしてしまうので行きたくない、見たくないという学生もいました。

水産加工業の復旧・復興を  
地域政策研究センターが  
サポート

震災後1カ月経たないうちに、県では津波復興委員会が立ち上がり、私も県立大学から委員として参加しました。その後宮古市で組織された復興委員会では委員長を務めさせていただきました。委員会にはさまざまな立場の方々に参加されていて、いろいろな話を聞くことができ

ました。そこでお聞きした話や課題を大学に持ち帰り、ちょうど震災の年に設立された本学の地域政策研究センターで震災からの復旧、復興に資する調査研究を組織的に実施していく体制ができました。地域政策研究センターはもとも、地域課題対応型の研究を行う大学付属の機関として発足したのですが、震災後しばらくは復興に特化した研究を行っていくという方針となっていました。

ている人は全体のほんの数パーセント。実は水産加工業に従事している人の割合が大きいです。ここには輸送や梱包資材製造などの関連産業も含まれます。東日本大震災では、まさにその水産加工業が大きな打撃を受けました。

沿岸の地域経済の復旧・復興を考えた時、その鍵となるのが水産加工業でした。震災後人口流失が大きな問題となるなか、復興に向けた最重要課題は雇用を確保することであり、その受け皿になりうるのは、地域特性に見合っている一定の蓄積が進んでいた水産加工業にはかなりませんでした。そこで私は、宮古市や産業支援センター、市内の水産加工業に携わる若手経営者などと協働し、地域政策研究センターの震災復興研究として、水産加工業の復旧・復興に取り組むこととしました。

私はまず地域に実際に足を運び、地域の人たち、この研究の場合は水産加工業者の皆さんと会って、今何に困っているのか、これから何をしたいのかなどニーズをお聞きすることから始めました。それに対し、大学や行政に何ができるのかを検討していききました。私の役目



学長、学部長等で宮古市内の水産加工業者を視察

在はとても心強いものです。私はたまたま経営学を専門としていたため宮古の地場産業の復興研究に携わりましたが、本学には幅広い分野の研究を行っている先生方が在籍していらつしやいます。地域政策研究センターを通して、それぞれの分野のプロフェッショナルが地域課題の解決に取り組んでいくことは岩手県立大学としての使命であると思います。大学ですから第一義的には学生を育てること、教育が大切なのももちろんですが、地域とともに課題解決に取り組んでいくのも本学の大きな役割です。この理念をもとに作られた地域政策研究センターが復興研究に取り組むのは当然



大震災からの復興に向けた研修会の模様

り前の流れだったと思います。私たちは常に、地域の皆さんにニーズをお聞きし、求めるものに対して大学や行政に何ができるかを考えながら研究活動を行ってきました。震災から10年がたち、地域政策研究センターでは復興以外の地域課題にも取り組むようになっていきました。現在は自治体だけでなくNPOなどと協働することもあり、相談件数はどんどん増えている状況です。これは、本学の行ってきた地域課題対応型研究というものが周知されてきたということであり、徐々に浸透してきているということだと思えます。今、地方や地域は拡大していく時期ではないかもしれませんが、しかし人口が減っても、そこに住む人々が幸せに暮らせる地域づくりをしていくために、地域に寄り添う岩手県立大学であり、「地域政策研究センター」でありたいと感じています。

震災は現代の日本社会が抱えている諸課題を誰もか解るよう浮き彫りにしました。例えば性差や経済的な格差、多様性への不寛容など、そのしわ寄せが特に弱者へと向かって顕在化しているのを感じます。震

災という非常時をきっかけに、社会の矛盾が炙り出されたような気もするので。震災前の暮らしや産業を取り戻すだけでなく、格差のない社会、多様性を認め合う社会を視野に入れた、社会構造も含めた地域の再生を今後は目指していかねばならないのではないかと感じています。



本学の復興研究を紹介している様子(遠野市)

は、アドバイザーというよりは自称セコンド。考え得るありとあらゆることをして、宮古市の水産加工業が再生しそれが継続していけば、雇用にもつながるしほかの産業にもいい影響が波及していくだろうとの



みちのく潮風トレイル(重茂半島)の視察

思いで関わってきました。はじめに取り組んだのは、相乗効果を狙って小規模の地場企業がグループを結成する動きを支援することでした。特に宮古市の水産業者は小規模な会社が多かったため、事業者同士がゆるやかに連携し、互いに協働して事業を継続していくことを目指しました。また事業者からは、途絶えてしまった販路を取り戻すためにネット販売や海外展開に挑戦したいという要望も出されました。海外に商品を売り込むため、私も宮古市長や事業者の方々と直接現地を訪問して、台湾を含む東アジアの市場開拓に取り組みました。

販路の開拓とともに大きな課題だったのが人手不足でした。賃金の高い建設業に人材をとられ、水産加工業の人手不足は非常に深刻な状況でした。そんななか頼りにしていたのがこれまで従事してくれていたベテランの女性従業員さんたちでしたが、入居した仮設住宅が工場から遠く離れてしまったこと、自分の生活を取り戻すので精一杯だったこと、そして徐々に家族の介護の問題が出てきたことで、水産加工の現場に復帰していただくことが困難な状況もありました。

それでも取組の成果が少しずつ見えてきた頃、魚の不漁という問題が持ち上がりました。外から原料を仕入れるなどしてなんとか対応していますが、コストはもちろんかかりますし、宮古ブランドとして売り込むにはやはり弱い部分もあり皆さん苦労しています。ただ一方で、



復興に向けた水産加工品の企画・販売

これまで培ってきた加工技術で高品質な製品を生み出していくことは可能ですが、原料不足はいま一番大きな課題ですが、ここをなんとか乗り越えられるようなサポートをしたいと思っています。

### 地域課題に取り組んでいくことが本学の使命

この震災が宮古短期大学の学生に与えた影響はもちろん大きかったと思います。被災直後の街の惨状が心の傷として残っている学生も少なくありませんが、自らも被災者となった経験を経て、卒業後、沿岸地域の復興の力になりたいと自治体職員になった学生もいます。私を含め、震災について授業で話したり、自身の復興研究の現場に学生を連れて行った先生もいらつしやいましたが、教育の力というよりむしろ、宮古という場所で2年間を過ごしたことが学生には非常に大きく影響しているのではないかと思います。甚大な被害を受け、そこから復興しようとする街に暮らすことで、学生は自然に地域に貢献したいという気持ちを持っていったのではないのでしょうか。そのような学生の存